

より良く生きる ― 出居清太郎先生の世界 ― 第28回

山 本 博 也

「二つ一つ」の世界観（その4）

（1）心通りに現れる

（若き日の出居清太郎先生、ある夜乞われるままにある家を訪ねました。そこは貧民街の一室で、家族5人、四畳半一間の生活。名状し難い悪臭に耐えながら、夫婦の心の持ち方について深夜まで指導をし、泊まっていくつてくれという誘いを断り財布のお金をすべて夫婦に渡して、帰途につきました。途中で橋守りの爺さ

んの暴言にあつて、殴つてやろうかと思ひ、その腹立ちまぎれに派出所の巡査を怒らせて、警察署に留置されました。そこで先住者数人と口論し、「新入りのくせに生意気だ」とポカポカと殴られたのでした。）

その一夜、私は入口に近い隅っこで小さくなって過ごしたが、心を鎮め、冷静になつてみると、その夜、私の身の上に現われたことはすべて心通りであることに気がついた。

その一は、「こんな臭い、豚小屋で泊まれるものか」と思ひ、夫婦の好意を断つた。だから、心通りに「豚小屋」で泊ま

ることになった。

その二は、橋守りの爺さんを殴ってやろうと思った。そう思った心の通り、留置所で散々に殴られた。

その三は、財布の金を恵み与えて、自分は善いことをしてきたという自信過剰のゆえに、誰に対しても威張り高ぶった気持ちと言葉を使った。その結果、威張った巡査と留置所の先住者に屈服させられた。

すべて心通りに現われる——すべての訳がわかれば、貧民街より悪臭のただよう、そして堅い板の間の四畳半も、意外に楽しいところでもあった。

（出居清太郎先生のことばから）

■原因に見合う結果が出てくる

ここで「心通りに現れる」というのは、目の前のコップの水を見て、ビールだといいなと思ったら水がビールになるとか、宝くじが当たったらいいなと思ったら当せんするとかということではないでしょう。殴ってやろうと思ったら、逆に殴られてしまったわけですし、豚小屋に泊まれるかと思ったら、実際には泊まることになってしまったわけですから。

つまりここでいう「心通り」というのは、心で思ったことに見合う結果が出てくるということではないでしょうか。

ナスの種をまけばナスが成り、ウリの種をまけばウリが成るわけで、原因があればそれに対して当然の結果が出る、つまり原因と結果も「二つ一つ」の関係にあるといえます。



野葡萄 大西 恵

(2) 回転の理法

太陽は東から出て西に没する。没してもまた必ず東から出てくる。これは地球が回転しているからであり、天地自然の秩序正しい法則である。われわれの行い

にしても、行ったことは必ずかえってくるという真理を示している。善行も悪行も、必ずかえってくる。一つの行いをして、それがそのまま結末も見せずに行方知れずにな

ってしまうことはない。“回転”という理法の中に生かされているのであるから、人はその理法の外で生活は許されないのである。

(出居清太郎先生のことばから)

■善行も悪行も必ず結果が出る

私たちは生活の中で、さまざまな行いをし、言葉を出します。それらの一つ一つは、その場限りのこととして終わってしまうのではなく、それらの集積が、その是非善悪に見合う姿として、将来の私たちの生活・境遇の中に必ず現れてくるということでしょう。

そうであれば、今の境遇に対して、また自分に起きたことに対して、冷静に、素直に対応できます。また自分の行いが

誤解されたとしても、将来を楽しみに待つことができます。

■さまざまにある「二つ一つ」の関係

これまで本誌第25回から今回の28回まで、いくつかの「二つ一つ」の関係をみてきました。

生かされる―生きる

相手―私

難有り―有難し

原因―結果

このほかにも、出居清太郎先生のことばには「二つ一つ」の関係を示すものはいくつもあります。

与えられた魂―拝借した肉体

教えられたり―教えたり

怒りを、持たず―持たさず

見事に差し上げて―上手にいただく
物―心ともに

他―自ともに

長を敬い―幼をいつくしみ

敬の添うた愛、愛の添うた敬

切って―つなぐ

つかず―離れず

生死は一如

このように、世の中は「二つ一つ」で成り立っていることを常に意識し、一方だけに偏った考え、行動をとらないこと、両方の調和をはかることが大事だと教えられます。

以上で『「二つ一つ」の世界観』シリーズは終わることにします。

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1
修養団捧誠会 <https://www.hoseikai.or.jp>